

## 漱石「彼岸過迄」論

——運命のアイロニーと愛の不透明性をめぐって——

山 本 勝 正

る。最近の研究では、

個々の意識の集積として作品世界を構築するという、いわばジェームスの多元的宇宙観の小説的実現である。<sup>(2)</sup>

という小倉脩三氏や、

探訪者敬太郎を使い、「謎解き」の連鎖性のある小説<sup>(3)</sup>

という酒井英行氏や、「彼岸過迄」の構造と須永の意識構造が相似形であることを指摘した安藤久美子氏にみられるように、何とかこの分裂した印象をあたえる「彼岸過迄」を統一的に把握しようという傾向が多くみられ、それなりの説得性もある。に

もかわらず、長篇としての構想の破綻は否定できない事実でもある。また、その他にも、この作品には構成的な点において、問題は多いようである。最近、松浦武氏<sup>(6)</sup>、秋山公男氏<sup>(7)</sup>、佐々木充氏が、具体的な内容は省くが、それぞれ別の観点から漱石のこの作品における錯誤を指摘されている。松浦氏は、錯誤を指摘しながらも、そういう錯誤をうんだこと自体に、漱石の時代に先んじた新しさがあったというように、プラスの方向で

「彼岸過迄」は、「東京朝日新聞」に、明治四十五年一月一日から四月二十九日まで、百十九回に亘って連載された。<sup>(1)</sup>「彼岸過迄」は、後期三部作の第一作目にあたる作品であるが、発表時点から現在にいたるまで高い評価をうけているとはいえない作品である。その理由として次の事が考えられよう。

まず、たとえ「個々の短篇を重ねた末に、其の個々の短篇が相合して一長篇を構成する」(「彼岸過迄に就て」)という試みが、漱石にとって、スチーヴンソンの「新アラビヤ物語」にヒントをえた新しい試みであったにせよ、各短篇のつながりがうまくいっていないという事実があげられる。特に、面白味をねらった「風呂の後」から「報告」までの前半と、「雨の降る日」から「松本の話」(「結末」)までの、深刻な内容をもった後半とのアンバランスは否定できないし、前半の主人公であった田川敬太郎も、後半になるとほとんど登場しないという状態であ

捉えておられるが、佐々木氏によれば、それは作品の成否にかかわる基本的なミスとなるのである。また、秋山公明氏の意見に対しては、既に酒井英行氏の反論もあるが、これらの意見に対する当否はおくとしても、この様な論が多くでてくること自体、この作品の構成上に問題点があることを物語っているといえよう。さらにまた、早くに、

『彼岸過迄』の価値的焦点は自然『須永の話』と『松本の話』との二篇に落ちて行くわけであるが、事實は實際その通りであつて、この二篇を外にすると、『彼岸過迄』の芸術的価値は、決してしかく重大なものではない。<sup>(10)</sup>

という指摘がある様に、「彼岸過迄」の作品的価値は後半にあり、前半には作品的価値があまりないことも事實である。最近の研究では、敬太郎を中心とする前半に積極的に意義を見出すうとするものも多いが、にもかかわらず、作品の面白味を中心をおいた前半の価値は低いといわざるをえないであろう。

以上の三点からみて、「彼岸過迄」は、漱石にとって失敗作であるという一面をもっていることは否定できない。そうなった外的理由として考えられるのは、前作「門」（明治43年3月～6月）が、新聞小説として、読者の評判という点では必ずしも成功したとはいえなかったことや、修善寺の大患（明治43年8月24日）に代表されるように病気がちであったことなどから考えるとと思われる創作意欲の減退である。漱石は、朝日新聞入社以

来、毎年一本は連載小説を発表してきたが、前作「門」と、この「彼岸過迄」との間には、常になく長い空白があるのである。その空白の時期に、漱石は、「思ひ出す事など」（明治43年10月～明治44年4月）で、

たま／＼芸術の好きなものが、好きな芸術を職業とする様な場合ですら、其芸術が職業となる瞬間に於て、眞の精神生活は既に汚されて仕舞ふのは当然である。芸術家としての彼は己れに篤き作品を自然の気乗りで作り上げようとするに反して、職業家としての彼は評判のよきもの売高の多いものを公けにしなくてはならぬからである。（三十七）と述べている。この言葉から、この頃の漱石が、作家としての自己に純粹であろうとする気持ちと、また一方では、現実に妥協して、読者を意識した面白味のある作品を作ろうとする気持ちとの矛盾の中で悩んでいることがわかる。そして、その様な漱石の気持ちは、そのまま「彼岸過迄」の執筆姿勢に持ち込まれたのである。というのは、漱石は、「彼岸過迄に就て」の中で、

たゞ自分らしいものが書きたい丈である。といひながら、また一方では、

久し振だから成るべく面白いものを書かなければ濟まないといふ気がいくらかある。

といているからである。以前の漱石なら、悪くいえば、読者

に迎合するような気持ちなどなかった筈である。このような悩み、作家としての迷いが、「彼岸過迄」に失敗作の一面をもたらしたのであろう。であるからして、「彼岸過迄」は、中期三部作の「三四郎」、「それから」、「門」などと違って、「漱石は自分の主題もまだ鮮明でなく、その小説的実現に自信もなかったとしか考えようがない。」<sup>(ii)</sup>という、桶谷秀昭氏の指摘の如くであらう。

「彼岸過迄」の主題は、作品後半になって描かれる、須永と千代子の関係の中に、また須永の人間像の中に形成されるといつてよいであらうし、そこに作品の根本的価値が存するのであることは確かである。しかし、また敬太郎を中心とする前半も無意味ではないし、それなりの意義はあると思われる。以下、敬太郎を中心とする前半の意義を、また、たとえ分裂していても、後半との関係もないわけではないので、後半との関係も視野に入れつつ、検討していくことから、作品を分析していきたい。

## 二

それでは、田川敬太郎を中心とする前半「風呂の後」「停留所」「報告」を中心に考察していきたい。前半の主人公敬太郎はどのような人物として設定されているのであろう。彼は、「未来を有つ青年」(「風呂の後」十)であり、「遺傳的に平凡

を忌む浪漫趣味の青年」(同四)「浪漫的な敬太郎」(同六)「彼に固有の浪漫趣味」(「停留所」二)「浪漫家」(同三)とあるように、若いロマンチストとして設定されている。彼は、まさしく、この作品に面白味をねらった漱石にふさわしい人物であらう。作品は、この敬太郎が、大学卒業後、職を求めての運動と奔走にあけくれる日常の描写から始まる。作品前半においては、この敬太郎と森本、敬太郎と田口との関係を基本として作品は展開するのである。森本は、敬太郎と同じ下宿の住人で、三十以上であるが独身であり、新橋の停車場へ通勤している人物である。敬太郎は、この森本に対して、「一種の好奇心」(「風呂の後」三)を有っている。それは、敬太郎が「凡て森本の過去には一種ロマンスの臭が、箒星の尻尾の様にぼうつと掩被さつて怪しい光を放つてゐる。」(同)と感じている為でもあり、

彼の生活は学校を出て以来たゞ電車に乗るのと、紹介状を貰つて知らない人を訪問する位のもので、其他に何といつて取り立てゝ去ふべき程の小説は一つもなかつた。(「風呂の後」五)

の様な平凡な日常生活をおくっている彼にとって、森本は「冒險家」(「風呂の後」八)であり、彼のロマンを満たすべき人物であった。敬太郎は、森本を「自分の同類」(同一)とまで思っているのである。

ところが、森本の突然の失踪以後、事態は違ってくるのである。下宿の主人から、失踪者の友人として居所を教えてくださいと聞かれた時、敬太郎は、「大いなる不面目」(「風呂の後」十)を感じ、「森本のやうな浮浪の徒と一所に見られちゃ、少し体面に係はる。」(同十一)とまでいうのである。この時の敬太郎は、森本が、転々として職を変え、子を失い、妻とも別れ、満州にまで流れて行った人生の敗残者であることをはっきりと認識したのであろう。即ち、敬太郎は、ここで始めて森本の現実がはっきりと見えたのである。敬太郎の、森本に対するイメージは次の様に一変する。

彼は比時忽ち森本の二字を思ひ浮かべた。すると其二字の周囲にある空想が妙に色を変へた。彼は物好にも自ら進んで此後ろ暗い奇人に握手を求めた結果として、もう少しで飛んだ迷惑を蒙る所であつた。(中略)彼の空中に編み上げる勝手な浪漫が急に温味を失つて、醜く理想像から出上つた雲の峰同様に、意味もなく崩れて仕舞つた。(「停留所」五)

と感じた敬太郎は、森本の「顔の後に解すべからざる怪しい物」(「停留所」五)まで感じるのである。ここで、敬太郎は「呑気生活」(「風呂の後」八)とみえた森本の生活が、実は暗い現実生活でしかなかったことを知った筈である。それは、彼にとつて、森本に対するロマンが無意味であつたことを意味していた

筈である。だがしかし、以後の作品展開において明きらかなように、敬太郎は、この時の体験を内面化していかないのである。それ故、彼はあくまで、現実のみえない人間であり、ロマンをおいつづける人間なのである。そのことは、次の敬太郎と田口との関係において明きらかである。

田口というのは、敬太郎の友人であり、後半の主人公である須永市蔵の叔父にあたり、世間的に成功している実業家である。

敬太郎は須永の紹介で、彼に職の世話を頼むことになるのである。その田口から、ある一人の男の行動を探偵し、報告しろという依頼を受け、試しに使われることになる。その時、敬太郎は、始めて自分が危険なる探偵小説中に主要の役割を演ずる一個の主人公の様な心持がし出した。(「停留所」二十一)と感じ、「待ち設けた空想よりも猶浪漫的」(「停留所」二十二)であると思うのである。ともかく、敬太郎は云われた通り、必死になって探偵という行為をするのである。ここでの敬太郎の探偵行動を評して、山田有策氏は、

「停留所」に細密に描かれる敬太郎の△冒險▽は△読者▽にとつて実にスリリングで面白いことは指摘しておく必要があろう。<sup>12)</sup>

と述べておられる。ここで、この作品に面白味をねらった漱石の意図が、それなりに成功しているようにも見える。だが一方で、佐々木充氏の「敬太郎は、小川町停留所付近のたたずまい

は、知悉しているはずである。」にもかかわらず、漱石が「あまり馴染みのない場所」のように描いており、「どうみてもここでも敬太郎の意識と行動とはリアリティが無い<sup>(13)</sup>」というような意見もある。確かに佐々木氏の指摘の通り、この作品をよく読めば、敬太郎の行動は不自然という他はない。それはやはり作者漱石が、面白味をねらうあまり、敬太郎に知悉している筈の場所を、不案内の場所の様を描いているのであり、そこに構成的な面での無理があるといえよう。従って、ここでの敬太郎の探偵行動の描写に価値があるとは思えないのである。

後に、敬太郎は、探偵の対象になった松本から事情を聞き、自分の行為の無意味さを知るのである、その場面を漱石は次のように述べている。

敬太郎は、田口の義弟に当る松本が、叔父といふ資格で、彼の娘と時間を極めて停留所で待ち合はした上、ある料理店で会食したといふ事実を、世間の出来事のうちに最も平凡を極めたものゝ一つの様に見た。それを込み入った文でも隠してゐるやうに、一生懸命に自分の燃やした陽炎を散らつかせながら、後を追掛けて歩いたのが、左も／＼馬鹿／＼しくなつて来た。(「報告」十三)

ここでも、漱石は敬太郎の探偵という行為が無意味であったことを、敬太郎が見たと思つたロマンは、平凡な現実でしかなかったことを述べている。

以上、漱石は、敬太郎をして、森本との関係において、また、田口との関係において、ロマンが暗い現実に変貌したり、平凡な現実でしかなかったりして無意味になっていくという体験をさせている。にもかかわらず、敬太郎は、須永と千代子との関係においても、現実をみようとしないで、ロマンをみようとしているのである。この二人の関係が、敬太郎の想像した関係と全く違っていたことは、作品後半になって明白になる。作者漱石の眼は敬太郎に対してアイロニカルであるといえよう。ともかく、敬太郎がつくりあげた三つのロマンが次々と崩壊していくところに作品「彼岸過迄」の世界が形成されていくことは間違いないのである。そして、敬太郎にとって一つの問題は、彼がこれらの体験を十分内面化しているか。いいかえれば、彼に現実がみえてきたのかどうかであろう。少なくとも、彼は、自己の体験を作品内においては内面化していない、彼には現実がみえていないということ是否定できない事実であろう。敬太郎に変化、成長を認める意見もあるが、私は認めることができない。というのは、今迄みてきた如く、敬太郎の森本へのロマンが崩壊したことが、次の田口から依頼を受けた探偵という行為には生かされていないし、また、探偵という行為に対して、敬太郎は「あんな小刀細工をして後なんか跟けるより、直に会つて聞きたい事丈遠慮なく聞いた方が、まだ手数が省けて、こうして動かない確かな所が分りやしないかと思ふのです」(「報

告「六」と反省してはいるが、その行為の中での幻滅にもかかわらず、さらに次の須永と千代子の関係にロマンをみようとしていることからみても、また二人の関係の実態を知った結果どうなったかは、作品内には描かれていないということからしても、敬太郎に変化、成長を認めることはできないといえよう。

若いロマンチストである敬太郎が、ロマンを追い求める、しかし、それが無意味であるという事実は、同時に作者漱石の面白味をねらうことの無意味さも意味していたのである、そして、その事は、作品後半にいたって、面白味を描こうとする作者の姿勢が消えてしまったことと無関係ではないであろう。それは、坂本浩氏の言葉を借りれば、

作者漱石の心内には、初めは気が乗らぬままに書き進んでゆくうちに、いつしか作家としての本来の文学的情熱が芽生えかけてきて、作品の面白さより、その真实性への探求が主力となってきたのであろう。<sup>14)</sup>

となる。また、いいかえれば、漱石は、前述の作家的迷いを作品を書いていくうちに克服したともいえる。

### 三

次に、作品の後半「雨の降る日」「須永の話」「松本の話」「結末」を中心に、作品世界を考えていきたい。作品後半は、須永と千代子の関係を軸として展開するのである。二人の関係

はどの様に描かれているのであろうか。まず、敬太郎が二人をどのようにみているのかということからみていきたい。森本の過去、田口の探偵にロマンをみようとした敬太郎が、次にロマンを期待するのは、須永と千代子の関係であった。敬太郎は、  
須永と此女（千代子——筆者注）が何んな文に二人の浪漫を織つてゐるのだらうと想像する（「停留所」一一）  
のであり、また

敬太郎は須永の門前で後姿の女を見て以来、此二人を結び付ける縁の糸を常に想像した。其糸には一種の夢の様な匂がある（「須永の話」一一）

と思うのである。そして敬太郎は、須永と、千代子と、須永の母の三人をみて、

たゞ敬太郎は偶然にも自分の前に並んだ三人が、有の儘の今の姿で、現に似合はしい夫婦と姑に成り終せてゐるといふ事に不図思ひ及んだ時、彼等を世間並の形式で纏めるのは、最も容易い仕事の様に考へ（「須永の話」一一）

るのである。ともかく敬太郎は、二人の関係にロマンを視、また、二人が結びつくのは、最も容易な事として考へるのである。彼の見方は軽薄という他はないが、事實は、「須永の話」を中心に展開するように、二人の関係は、敬太郎が考へるのと全く違っていることが明らかなになる。敬太郎は、その事實を、須永や松本から聞いて知るのだが、既に、須永と千代子の

対立は、二人の複雑な関係は、伏線的に「雨の降る日」に示されている。それは、火葬場で、二人が鍵をめぐる言い争う場面である。

二人の問答を後の方で冷淡に聞いてゐた須永は、鍵なら僕が持つて来てゐるよと云つて、冷たい重いものを袂から出して叔母に渡した。御仙が夫を受付口へ見せてゐる間に、千代子は須永を窺なめた。

「市さん、貴方本当に悪らしい方ね。持つてるなら早く出して上げれば可いのに。叔母さんは宵子さんの事で、頭が盆槍してゐるから忘れるんぢやありませんか」

須永は唯微笑して立つてゐた。

「貴方の様な不人情な人は斯んな時には一層来ない方が可いわ。宵子さんが死んだつて、涙一つ零すぢやなし」

「不人情なんぢやない。まだ子供を持つた事がないから、親子の情愛が能く解らないんだよ」

「まあ、能く御母さんの前でそんな呑気な事が云へるのね。ぢや妾なんか何うしたの。何時子供持つた覚があつて」

「あるか何うか僕は知らない。けれども千代ちゃんはお女だから、大方男より美しい心を持つてゐるんだらう」

(七)

須永を「不人情」と批判する千代子、また、千代子を「美しい心」を持つてゐるといいながらも、彼女の「子供を持つた

覚があつて」に対して、「あるか何うか僕は知らない」と痛烈に皮肉つてゐる須永、この場面は、二人の対立の深刻さをあらわしているといえよう。「雨の降る日」一篇は、他の篇と違って独立している形をとっているが、強いてあげれば須永と千代子の対立の伏線的役割ということにならう。

「須永の話」にいたつて、須永と千代子の複雑な関係は、その実態を明白にする。ここでは、須永が千代子との関係を敬太郎に告白するという形になっている。松浦武氏が「なぜ、須永はあの軽薄な敬太郎につらい自己告白をしなければならぬのか、その必然性がありません。」と述べておられるが、まさにその通りであり、ここにも構成上の無理があるといえよう。そしてまた、ここでの作家的反省が、後の「こゝろ」の「先生」と「私」の関係にみられるかもしれない。即ち「こゝろ」で、漱石は、「先生」が「私」に告白する必要性を執拗に問いつづけているからである。須永の悩みより、「先生」の悩みの方がより深刻であつたこと、須永は、自己の出生の秘密までは敬太郎に告白してゐない点に多少の問題はあるにしても、もし「私」が敬太郎の如き軽薄な人物なら、「先生」は「私」に告白してゐないであらう。

「須永の話」には、須永と千代子の複雑な関係が描かれている。須永と千代子は、須永の母によって、結婚することに決められた関係として設定されている。二人の関係は、お互に、意

識の上では明確に愛を意識していないながら、無意識では愛している様な微妙な関係である。千代子の須永への愛については、既に「千代子の心理は外がわから描かれているにすぎない。千代子の性格は現実性にまで到達していない。」<sup>(行)</sup>という岩上順一氏の指摘もあるように、彼女の内面の描写がないので、よく分らない点もあるが、たとえば、須永がずっと以前にかいた絵を大切にもっていたりする事、「須永の話」十などによって明きらかであろう。また、須永の千代子への愛については、たとえば、千代子から結婚が極ったという嘘を聞いた時の彼の態度によって明白である。

僕は自分の気分を変えるためわざと彼女に何時頃嫁に行く積かと聞いた。彼女はもう直に行くのだと答へた。

「然しまだ極った訳ぢやないんだらう」

「いゝえ、もう極つたの」

彼女は明らかに答へた。今迄自分の安心を得る最後の手段として、一日も早く彼女の縁談が纏まれば好いがと念じてゐた僕の心臓は、此答と共にどきんと音のする浪を打つた。さうして毛穴から這ひ出す様な膏汗が、背中と腋の下を不意に襲つた。千代子は文庫を抱いて立ち上つた。障子を開けると、上から僕を見下して、「嘘よ」と一口判然云ひ切つた儘、自分の室の方へ出て行つた。

僕は動く考もなく故の席に坐つてゐた。僕の胸には忌々

しい何物も宿らなかつた。千代子の嫁に行く行かないが、僕に何う影響するかを、此時始めて実際に自覚する事の出来た僕は、それを自覚させて呉れた彼女の翻弄に対して感謝した。僕は今迄気が付かずに彼女を愛してゐたのかも知れなかつた。或は彼女が気が付かないうちに僕を愛してゐたのかも知れなかつた。——僕は自分といふ正体が、夫程解り悪い怖いものだらうかと考へて、しばらく茫然としてゐた。「須永の話」十

ここで須永の「気が付かないうちに愛してゐたのかも知れない」という言葉の持つ意味は大きい。漱石はここで、須永にとつても、千代子にとつても、愛は明確に意識されていないといつてゐるのである。即ち、漱石は、須永にとつても、千代子にとつても、愛は不透明なもの、明確に意識されえないもの、捉え難いものとしてあるといつてゐるのである。このような愛を描いたところに、夏目漱石の作家としての認識の深まり、近代性を指摘できるといへよう。

そして、須永は、千代子との関係を次の様に分析する。

千代子が僕の所へ嫁に来れば必ず残酷な失望を経験しなければならぬ。(中略)彼女は、頭と腕を挙げて実世間に打ち込んで、肉眼で指す事の出来る権力が財力を攫まなくつては男子でないと考へてゐる。単純な彼女は、たとひ僕の所へ嫁に来て、矢張さう云ふ働き振を僕から要求



し、又要求さへすれば僕に出来るものとのみ思ひ詰めてゐる。二人の間に横たはる根本的不幸は此所に存在すると云つても差支ないのである。僕は今云つた通り、妻としての彼女の美くしい感情を、さう多量に受け入れる事の出来ないう至つて燻ぶつた性質なのだが、よし焼石に水を濺いだ時の様に、それを悉く吸ひ込んだ所で、彼女の望み通りに利用する訳には到底も行かない。「須永の話」十二

また、須永は、そのような二人の關係を、「恐れない女」と「恐れる男」(「須永の話」十二)の關係ともいいかえて(18)いる。「恐れる男」である自分と、「恐れない女」である千代子が結ばれることは不幸でしかないと須永は考へるのである。このような点に限つていへば、漱石は、二人がそれぞれに問題があるというより、むしろ、二人の氣質、もしくは性格の相違によつて、二人が結ばれないと須永に理解させているようである。とすれば、須永と千代子の關係は、性格悲劇の様相を呈しているといえよう。しかし、このような須永の認識も、彼にとつては、しよせん「頭」(同二十八)の理解でしかなく、自己の「胸」(同)を、千代子への思いを抑へることができなかつたこと、後述のような出来事になつてあらわれてくるのである。

#### 四

その出来事は、須永が、夏休みに、千代子に招かれて鎌倉に

いった時に会つた高木という男を意識したことからはまるのである。

眼の当りに此高木といふ男を見る迄は、さういふ名の付く感情に強く心を奪はれた試がなかつたのである。僕は其時高木から受けた名状し難い不快を明らかに覚えてゐる。さうして自分の所有でもない、又所有にする気もない千代子が原因で、此嫉妬心が燃え出したのだと思つた時、僕は何うしても僕の嫉妬心を抑え付けなければ自分の人格に対して申し訳がないような気がした。僕は存在の権利を失つた嫉妬心を抱いて、誰にも見えない腹の中で苦悶し始めた。「須永の話」十七)

ここで、須永が高木に対する嫉妬を「存在の権利を失つた嫉妬心」といつていることは重要である。後に、漱石は「嫉妬は愛の半面」(「こゝろ」下三十四)といつているように、愛があつてこそ嫉妬があるのだが、須永には意識上、千代子への愛がないから、「存在の権利を失つた」ということになるのである。このように、高木に嫉妬を感じる須永には、やはり、千代子への無意識の愛があることは否定できないのである。ともかく愛の実在が信じられずに、嫉妬の実在のみ信じられる須永は、確かに不幸な存在であるといえよう。

須永は「千代子と僕に高木を加へて三つ巴を描いた一種の關係が、夫限發展しないで、其中の劣敗者に當る僕が、恰も運命

の先途を予知した如き態度で、中途から渦巻の外に逃れる」(「須永の話」二十五) ような形で、千代子や高木のいる鎌倉から東京へ帰るのである。東京へ帰った須永は、「ゲダンケ」という書物を読んだ後、次のような気持ちに襲われる。

僕は此変な心持と共に、千代子を見てゐる前で、高木の脳天に重い文鎮を骨の底迄打ち込んだ夢を、大きな眼を開きながら見て、驚ろいて立ち上つた。(「須永の話」二十八)

この描写は、須永の千代子への愛の強さと、高木に対する嫉妬の深さをあらわしているものであり、たとえ、鎌倉から東京に帰っても、やはり、千代子と高木のことを強く意識せざるをえない須永をあらわしているといえよう。漱石は、ここで「頭」ではわかって、「胸」は抑えきれないという須永の精神構造を明確に示しているといえよう。

そして、鎌倉から母を送ってきた千代子に、須永が、必要もないのに高木のことを聞いた時、二人の関係は、決定的ともいえる深刻な事態を迎えることになるのである。

「唯何故愛してもゐず、細君にもしやうと思つてゐない妾に対して……」

彼女は此所へ来て急に口籠つた。不敏な僕は其後へ何が出て来るのか、まだ覚れなかつた。「御前に対して」と半ば彼女を促がす様に問を掛けた。彼女は突然物を衝き破つた風に、「何故嫉妬なさるんです」と云ひ切つて、前より

は劇しく泣き出した。僕はさつと血が顔に上る時の熱りを両方の頬に感じた。(「須永の話」三十五)

ここでの千代子の、鎌倉での須永の行った行為への批判の言葉は、まさに須永という存在を完全にうちのめしたといえよう。彼女の批判の通り、須永は醜い嫉妬をさらけ出した卑怯な人間であり、エゴイストなのである。

ただここで注意しておきたいことは、この須永と千代子の関係において、問題は須永の方にあるだけではないということである。千代子の方も、作者によって、否定的な存在として描かれていることも事実である。確かに、ここで引用した部分にみられるような鋭い言葉を、男性に吐いた女性は、今迄の漱石の作品にはいなかったし、それは正宗白鳥氏が、「私は、『須永の話』を中心とした『彼岸過迄』に於て、はじめて、漱石の頭から描きだされた澁刺たる女性を見るのである。それほど千代子はよく描かれてゐる」といわれる所以でもあるであろう。それは、ともかくとして、須永は、自分のことを「我儘」(「須永の話」五)、「意地の強い」(同八)、「気随」(同九)、「片意地」(同)と否定的にいう一方で、千代子に対しては、繰り返し「純粹」(「須永の話」七、十一、十二、三十一)というが、その言葉は、彼女の一面でしかないということに留意しておく必要があるであろう。作者漱石は、千代子に対して意外に辛辣なのである。今その具体例を挙げておきたい。

まず「雨の降る日」である。松本の雨の降る日に客を断る評判を聞いた千代子は、

「あの叔父さんも随分変つてるのね。雨が降ると一しきり能く御客を断つた事があつてよ。今でも左うか知ら」

(一)

といっているが、既に指摘もあるように、これは、やはり、彼女が、松本の、宵子を失った悲しみを理解しえていないことをあらわしているといえよう。また、宵子の葬式、焼香の時の場面である。

寺では読経も焼香も形式通り済んだ。千代子は広い本堂に坐つてゐる間、不思議に涙も何も出なかつた。(中略)

焼香の時、重子が香を撮んで香爐の裏へ燻るのを間違へて、灰を一撮み取つて、抹香の中へ打ち込んだ折には、可笑しくなつて吹き出した位である。(六)

ここでの千代子は、宵子の死をあまり悲しんでいないようである。後に、千代子は前に引用した「七」の火葬場の場面で、須永を「不人情」と批判するが、この言葉は、千代子自身にも向けられる言葉であつたともうえよう。そして「雨の降る日」の最後で千代子は、

「叔母さん又奮発して、宵子さんと瓜二つの様な子を拵へて頂戴。可愛がつて上げるから」

といい、叔母から、

「宵子と同じ子ぢや不可ないでせう、宵子でなくつちや。御茶碗や帽子と違つて代りが出来たつて、亡くしたのを忘れる訳にや行かないんだから」(八)

という批判をうけているが、ここでも、かけがえない我が子宵子の死を悲しんでいる叔母の気持ちを理解できない千代子が描かれている。この「雨の降る日」の三つの描写から、千代子に対する作者漱石のアイロニカルな姿勢がうかがいしれるのである。

また、「須永の話」の中からあげれば、先にみた場面であるが、千代子が結婚がきまつたという嘘を須永にいったこと(十)、電話を一緒にかけることによつて須永の好奇心を挑発する行為をしたこと(同)などからも、彼女の「技巧」、エゴイズムは明きらかである。後に須永が、

鎌倉へ行く迄千代子を天下の女性のうちで、最も純粋な一人と信じてゐた僕は、鎌倉で暮した僅か二日間の間に、始めて彼女の技巧を疑ひ出したのである。(「須永の話」三十一)

と千代子の「技巧」を疑い出すが、考えようによつては、既に千代子の「技巧」、エゴイズムは描かれていたともいよう。

以上の考察からみて明きらかな如く、千代子には須永がいうような「純粹」である一面はあるにしても、そのみでなく、「技巧者」で、他人への思いやりのない、自分のことしか考え

ない、エゴイストである一面も確かにあるのである。

それ故、須永が鎌倉から帰った時、無論「執濃い油絵」(「須永の話」二十九)のような自分との比較も一因ではあるが、「一筆がきの朝貌の様な」(同)単純な作の発見にいたるのである。高木文雄氏は、

帰京したかれは、女中の作の、女らしいところに気づき、「彼女の身の周囲から出る落付いた、気安い、大人しやかな空気を愛した」(五の二十六)。だが千代子をもって技巧者とときめてしまったからだ。千代子も、作のようにないも考えない単純な女なのだ。<sup>(20)</sup>

と、作と千代子を同じような単純な女性と述べておられるが、今迄の考察で明きららかな如く、作と千代子は別のタイプの女性なのである。漱石は明きらかに作を千代子との対照において設定しているのである。それだからこそ、須永が作に魅かれるのである。<sup>(21)</sup>しかし作も単純な女性でありつづけることはできないと漱石は書いている。それは、次の、作が千代子を意識する場面に明きらかである。

千代子は作が出て来ても、作でない外の女が出て来たと同じ様に、なんにも気に留めなかつた。作の方では一旦起つて、梯子段の傍迄行つて、もう降りやうとする間際に屹度振り返つて、千代子の後姿を見た。僕は自分が鎌倉で高木を傍に見て暮した二日間を思ひ出して、材料がないから

何も考へないと明言した作に、千代子といふハイカラな有毒の材料が与へられたのを憐れに眺めた。(「須永の話」三十)

作者漱石は、作に対してもアイロニカルである。そして、この場面は、漱石の現実認識の暗さを示す場面ともいえよう。

須永と千代子の二人の関係がうまくいかないのは、先に述べた性格悲劇的な面があるとともに、たとえあらわれ方は違つても、二人がそれぞれにもつエゴイズム、我執が大きなウエートを占めると漱石は述べているのである。それは、松本によれば二人は「真しやかに前後に通じない嘘」(「松本の話」一)で成り立つような関係にあるといえよう。結局須永と千代子の関係は、松本の

二人は或る意味で密接に引き付けられてゐる。しかも其引き付けられ方が又傍のものに何うする權威もない宿命の力で支配されてゐるんだから恐ろしい。取り澄ました警句を用ひると、彼等は離れる為に合ひ、合ふ為に離れると云つた風な気の毒な一対を形づくつてゐる。(「松本の話」一)という通りであろう。繰り返すが、須永と千代子の関係は、お互が愛し合っているのかどうかさえはつきりしない関係であり、一方では愛し合っているからこそ存在する嫉妬や憎しみが前面にあり、その一方で、愛そのものは、二人には、また読者さえにも不透明であるような特異な関係である。同時代に「作

者が、須永といふ人物を通して嫉妬感情そのものを弄んで居る嫌ひがある」という批判がある所以であろう。それはともかくとして、山田智彦氏は、このような二人の関係を評して、

恋愛関係とははっきり言えないような恋愛関係である。

が、同時に、須永と千代子の関係こそ、まさに恋愛関係なのだ、と言ってしまったてよいような氣もする。

や、

須永と千代子の関係は、男と女の関係の一つの新しい典型であり、二人の恋愛は一方では対立しながら又、一方では愛し合う男と女の永遠の課題でもある。

と述べておられる。漱石は、作品「彼岸過迄」において、須永と千代子の関係を通して、時代に先んじた新しい恋愛の形を描いてみせたのである。

## 五

「松本の話」にいたって、問題は、須永と千代子の関係より、須永個人の問題に、彼の性格と、出生の秘密の問題にしばらくてくるのである。須永市蔵という人間は、松本によって次のように説明される。松本は、

市蔵は自我より外に当初から何物も有つてゐない男である。(一)  
 といひ、そして

市蔵といふ男は世の中と接触する度に内へとぐるを捲き込む性質である。(二)

という。そこに「市蔵の命根に横はる一大不幸」(二)があるというのである。このような人間である市蔵は、今迄の漱石の作品にはなかつた内部的な人間である。

須永の母から市蔵の結婚の事で相談を受けた松本は、その時、須永に、松本が解剖してみせた「内へとぐるを捲く」須永の性格に関わってくるものである。「一種の僻み」(四)があることを指摘するが、須永は、その「僻み」がどこから出たのか、どうしてこうなったのかを知らせてくれと、松本を問い詰めるのである。それで松本はやむなく、須永が小間使いの子であること、従つて、母とは本當の母子ではないのであるという秘密を開示するのである。須永の出生の秘密について、漱石は、「須永の話」の中で、その伏線を何度も繰り返し描写している。父が死ぬ前にいった「市蔵、おれが死ぬと御母さんの厄介にならなくつちやならないぞ。知つてるか」(三)という言葉、父の死後の「御父さんが御亡くなりになつても、御母さんが今迄通り可愛がつて上げるから安心なさいよ」(同)という母の言葉。妙という妹が「僕の事を常に市蔵ちゃん」と云つて、兄さんとは決して呼ばなかつた。(四)こと、その妹の死後、父が「母に向つて、まことに御前には氣の毒な事をしたといつた」(同)こと。千代子との結婚について、須永が母に千代子

は血属だから厭だといった時、母は千代子が生れた時に頼んでいたのだからという。須永が何故そんな事を頼んだのかと聞いた時に、母の答える場面は次の如くである。

仕舞に涙ぐんで、実は御前の為ではない、全く私の為に

頼むのだと云ふ。しかも何うして夫が母の為になるのか、

其理由は幾何聞いても語らない。(六)

以上は、須永の出生の秘密の明きらかな伏線である。このような多くの伏線によって漱石は何を語りたかったのか。須永の「癖み」、内向的性格の原因が、彼の出生によるものであること、それは彼にとって、運命的なものであること。さらにいえば、須永が千代子とうまくいかないのは、前述の二人の性格の相違や、二人それぞれにもつ我執が原因であることは無論であるが、それとは別に、より根底にあるものとして、須永の背負った運命、「宿命の力」(「松本の話」一)があることをも物語っている。それは、漱石が、かつて「三四郎」で、広田先生が、出生の秘密を、自分が不義の子であることを知って「結婚に信仰を置かなくなる」(十一)ことを描いていたという事実にも通じるであろう。このような点から考えれば、須永と千代子の関係は、より須永自身に関わりをもつ運命悲劇的な様相を呈してくるともいえよう。

そして、さらに注意しておきたいことは、それ以外に、前述の伏線と違った種類の伏線があるという事実である。それは、

彼が鎌倉から帰ってから、小間使いの作を発見するという事実、千代子が島田に結った姿を見て、須永が、「大変美しく出来たよ。是から何時でも島田に結ふと可い」(「須永の話」三十三)と知っている事実である。この二つの伏線は、須永が松本から出生の秘密を聞いて、彼の本当の母が小間使いであり、島田に結っていた事があることを聞いて始めて伏線であることが意味をもってくるのであり、前述の伏線とは明きらかに違っているのである。後述の伏線は、前述の伏線の強調といえるかもしれない。ともかく、漱石は、この後述の伏線によって、人間のもつどうしようもない運命の暗さ、恐ろしさを須永の出生にみようとしているといえよう。いいかえれば、漱石は、このような描写を通して、合理的、理性的に割り切れない人間存在の闇を描いているのであり、それはまた、須永にとっては、決定的な「運命のアイロニー」(「須永の話」十二)であったともいえよう。

それでは、次に須永が出生の秘密を知った意味、それ以後の須永について考えてみたい。松本から出生の秘密を聞いた須永は、

「御話を聞いて凡てが明白になつたら、却つて安心して気が楽になりました。もう怖い事も不安な事もありません。其代り何だか急に心細くなりました。淋しいです。世の中にたつた一人立つてゐる様な気がします」(「松本の話」六)

といい、自己の苦悩の克服のため、旅に出るのである。その旅

先からの松本への手紙の最後の方で、須永は次のようにいう。

「僕がこんな煩瑣<sup>ぶんざ</sup>しい事を物珍らしさうに報道したら、

叔父さんは物数奇だと云つて定めし苦笑なさるでせう。然し是は旅行の御蔭で僕が改良した証拠なのです。僕は自由な空気と共に往来する事を始めて覚えたのです。こんな話らない話を一々書く面倒を厭はなくなつたのも、つまりは考へずに観るからではないでせうか。考へずに観るのが、今の僕には一番楽だと思ひます。僅かの旅行で、僕の神経だか性癖だかが直つたと云つたら、直り方があまり安つばくて恥づかしい位です。」(「松本の話」十二)

ここで須永は、「考へずに観る」姿勢の確立によつて、自己を「改良」したと述べている。松本が、須永に秘密を打ち明けた時、

僕は誰にでも明言して憚らない通り、一切の秘密はそれを開放した時始めて自然に復<sup>か</sup>る落着を見る事ができる

(「松本の話」五)

といっている言葉に対応しているようである。そしてまた、先の須永の言葉が「結末」を除けば、作品の最後にあたることもあつて、一見、須永は、彼自身にまつわる「内へとぐるを捲き込む性質」を、旅に出「考へずに観る」姿勢の確立によつて、「改良」することができたかのようにである。事実、土居健郎氏は、

松本が須永に彼の秘密を知らせたことは非常な治療的効果があつたといふことができる。(中略)それは真実が慰藉を与え、真実が治療的効果を及ぼすといふことである。相手に對して僻んでいるといつただけでは、その僻みを直すことができない。相手との関係に含まれていた虚偽を取り除き、その関係を真実の基礎の上におくことによつて初めて信頼が生まれ、僻みが消失するのである。<sup>(25)</sup>

と述べておられる。また、秋山公男氏は、  
漱石は松本の「所置」で、須永を救済した心算でいたのである。<sup>(26)</sup>

と述べられている。果してそうであろうか。漱石は、先に引用した松本の言葉(「松本の話」五)の前に、或学者の構演を引用していることを忘れてはならないであろう。その中に、

物の真相は知らぬ内こそ知りたいものだが、いざ知つたとなると、却つて知らぬが仏で済ましてゐた昔が羨ましくつて、今の自分を後悔する場合も少なくない。(「松本の話」五)

という言葉がある。これは、松本のいった言葉とは逆であると考えられる。漱石は、一方では真実を知ること、即ち須永にとつては、出生の秘密を知ることが肯定的に、一方では否定的に表現しているのである。従つて、須永が真実を知ることによつて、自己の「改良」が可能であつたと読みとることはむしろか

いのである。さらに、先程の松本への手紙の最後にいった須永の言葉に「直り方があまり安つぽくて恥づかしい位」という言葉があったが、それは同時に作者漱石の気持ちでもあろう。漱石は、作品の一応の結末として、須永の「改良」といつているに過ぎないのであり、漱石自身、須永を真実に改良せしめたと思つてはいないと考えられる。さらにいえば、苦悩の克服の旅にしてからが、堀井哲夫氏の

書簡中に登場する人物が、「くりくり坊主」(「松本の話」十)のおばさん、「昔の通人」(同十一)のお祖父さん、西洋人の男女(同十二)という、現実離れた様相を呈しているのも、旅の意味を明かしている。<sup>(27)</sup>

という意見もあるように、この旅行は、須永にとって逃避行でしかなかった、「一時の休息」<sup>(28)</sup>に過ぎなかつたといえるだろう。そしてまた、この旅行以後の須永、実は作品「彼岸過迄」はそこから始まっているのだが、の状態をみても明きらかである。この旅行から一年後、敬太郎に「君は益<sup>ます</sup>偏屈に傾くぢやないか」(「須永の話」二)といわれた須永は、「何うも自分ながら厭になる事がある」(同)といっているし、松本も、旅行以後の須永、現在の須永を、「今は其浮気を渴望してゐる。(中略)けれども実行は未だに出来ないで藻掻いてゐる。」(「松本の話」一)と、敬太郎に語っている。以上の如く、たとえ須永に「改良」を認めるにしても、それは一時的なものでしかないである

う。いやむしろ、彼が松本への手紙の中で、自己を改良したと云つたのは、自分を心配してくれる松本への思いやりであつたかもしれない。結局、須永は彼自身を改良することは出来なかつたのであり、彼は、たとえ出生の秘密という決定的な真実を知つたとしても、暗い運命の中で、孤独な自我の中で苦悩し続けていく存在である。それはまた、たとえ鎌倉から帰つた後の決定的とも思える須永と千代子の衝突という事件があつたとしても、二人の関係は結局はつきりしないまま続いていくことと照応してもいるのである。<sup>(29)</sup>無論須永が出生の秘密を知る以前と以後とは、全く同じであるといっているのではない。「市蔵は始め浮気を軽蔑して懸つた。今は其浮気を渴望してゐる」(「松本の話」一)程度の変化が、彼の内部であつたことは事実であらう。しかし、彼は、結局「世の中にたつた一人立つてゐる様な気がします」(同六)という孤独の中で、「内へとぐるを捲き込む性質」であり続けるほかはないのである。

以上の考察で明きらかな如く、「彼岸過迄」という作品は、漱石にとつて、構成上の色々の問題点はあるにしても、須永と千代子の微妙な関係、須永という内部的人間の描写という点において意義ある作品であるといえよう。

#### 註

(1) 但し、一月一日は「彼岸過迄に就て」を載せ、本文は二日より掲載。「大阪朝日新聞」には「彼岸過迄に就て」が載っていないので、一月二日より連載となる。



- (2) ▲漱石のウイリアム・ジェームス受容について―『彼岸過迄』論の手がかりとして―▽「日本近代文学」28集 昭和56年9月六〇頁
- 他に、伊豆利彦氏も「『彼岸過迄』論序説」(「講座夏目漱石」第三卷 有斐閣 昭和56年11月)で、ジェームスの多元的宇宙との関係において、「彼岸過迄」の構成について述べておられる。
- (3) ▲『彼岸過迄』の構成▽「国文学研究」75集 早稲田大学国文学会 昭和56年10月 一〇三頁
- 各短篇が謎の提出と、その解決という指摘は、既に内田道雄氏の「『彼岸過迄』一面」(「古典と現代」27号 昭和42年10月 二九頁)や、清水孝純氏「『彼岸過迄』の構造―運命のアイロニーとその超脱―」(内田道雄・久保田芳太郎編「作品論夏目漱石」双文社 昭和51年9月 二二〇頁)がある。
- (4) ▲『彼岸過迄』の構造―須永の意識構造と作品構造―▽「文学・語学」92号 昭和56年11月
- (5) それ以外には、たとえば玉井敬之氏の「森本の『冒険譚』は、後に展開される須永の話とほとんど等質のものといってもよい。」「『彼岸過迄』論―空想から現実へ―」帝塚山学院短期大学「研究年報」23号 昭和50年12月 四頁)という意見や、喜多川恒男氏の「敬太郎という形式的主人公の、まだ若い青年らしい女性への関心でもって、漱石は、各短篇をつないで行くという手法をとったと見られるのである。」「(『彼岸過迄』考―おもしろさの舞台装置―)「論集『日本文学・日本語』5現代」角川書店 昭和53年8月 一四頁)という意見がある。
- (6) ▲『彼岸過迄』の連鎖的構成―夏目漱石の錯誤とその意味するもの―▽「名古屋市立保育短期大学研究紀要」18号 昭和54年6月
- (7) ▲『彼岸過迄』試論―「松本の話」の機能と時間構造―▽「国語と国文学」58巻2号 昭和56年2月
- (8) ▲『彼岸過迄』質疑▽「日本近代文学」28集 昭和56年9月(9) 註(3)に同じ。
- (10) 赤木桁平(池崎忠孝)著「夏目漱石」新潮社 大正6年6月再版 二二六頁
- (11) ▲日常と深淵―漱石・修善寺大患前後―▽「文芸」10巻13号 河出書房新社 昭和46年12月 一九四頁
- (12) ▲『彼岸過迄』敬太郎をめぐる▽別冊国文学14「夏目漱石必携Ⅱ」学燈社 昭和57年5月 一三六頁
- (13) 註(7)に同じ。六六―六八頁
- (14) ▲『彼岸過迄』の世界▽「日本文芸学」18号 昭和57年3月 六頁
- (15) 平岡敏夫氏は「『彼岸過迄』論―青年と運命―」(「文学」39巻12号 岩波書店 昭和46年12月)で、「『あるか何うか僕は知らない。』とはきめて峻烈なことばである。こんなことばを吐いていいのか。軽い冗談として聞きのがすことのできないほどの女性という存在に対する不信、といて言い過ぎなら、それを不可能だとする意識がある。」(二〇頁)と述べておられる。
- (16) 註(6)に同じ。六頁
- (17) 「漱石入門」中央公論社 昭和34年12月 一四九頁
- (18) このような須永の分析にもかかわらず、やはり須永にとって千代子は捉え難い女性であり、そこどうしようもない須永の苦悩があることも確かである。それは、たとえば、「須永の話」二十五の如くである。また、外面的、内面的ということに別にすれば、敬太郎が始めて千代子を見た場面での捉え難さ(「停留所」二十九)とも奇妙に照応しているのである。その事は一考の余地があらう。
- (19) 「作家論」創元文庫 昭和26年9月 一九四頁

- (20) ▲須永市蔵▽「国文学」13巻3号 学燈社 昭和43年2月 五  
四―五五頁
- (21) 吉田精一氏の「お作のような女性が(中略)須永に適當なので  
あろうか。そうだとすると、彼はまた父の轍を踏むことになる。  
父と女中との関係が、別な形でこんなところに匂わせられている  
と見るのは、考えすぎであらうか。」(夏目漱石全集 第九巻『彼  
岸過迄他』解説 角川書店 昭和50年6月再版 四〇三頁)とい  
う指摘がある。とすれば、作設定の意味は大きいといえよう。
- (22) 「帝国文学」20巻11号 大正3年11月 一三一頁
- (23) ▲愛と嫉妬と▽夏目漱石全集 第九巻『彼岸過迄他』角川書店  
昭和50年6月再版 四一二頁と四一六頁。
- (24) 前述の作が千代子を意識する場面(「須永の話」三十)を、註  
(21)における、吉田精一氏の指摘の如く考えれば、ある意味で、  
これも出生の秘密の伏線であり、ここにも「運命のアイロニー」  
のあらわれをみることができよう。
- (25) 「漱石の心的世界」至文堂 昭和44年6月 一一六頁―一二七  
頁
- (26) 註(7)に同じ。
- (27) ▲漱石後期三部作(一)帰来員命根▽「女子大國文」77号 京都  
女子大学国文学会 昭和50年6月 27頁
- (28) 越智治雄▲『彼岸過迄』のころ―一つのイメージ▽「文学」  
36巻6号 岩波書店 昭和43年6月 一四頁
- (29) 小宮豊隆氏は、この二人の衝突以後「須永と千代子との関係  
は、一往これで断たれてしまったと見るより仕方がない。」(漱石  
全集 第十巻 解説 岩波書店 昭和54年4月 四刷 二八七頁)  
と述べておられるが、氏の意見は、たとえば、時間的にみて、二  
人の衝突以後、この事件のことを聞いた松本の「夫から市蔵と千  
代子との間が何うなつたか僕は知らない。別に何うもならないん

だらう。少なくとも傍で見ると、二人の関係は昔から今日に  
至る迄全く変らない様だ。」(「松本の話」一)といっていること  
からしてもおかしいと思える。「彼岸過迄」は、そのような二つ  
の事件が、決定的な事実となってしまう世界、もっと中途半  
端な状況を志向している作品世界と考えられる。

付記 「彼岸過迄」本文の引用は、新書版「漱石全集」第十巻(岩波  
書店 全35巻 昭和54年4月 四刷)によった。